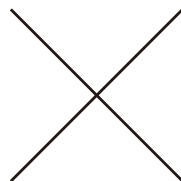


空海と高野山一二〇〇年

田辺小竹・若宮隆志展

竹



漆

SHOUCHIKU TANABE × TAKASHI WAKAMIYA

ごあいさつ

この度、高島屋では大阪店・東京日本橋店において、田辺小竹・若宮隆志展 竹 × 漆 『空海と高野山 1200 年』を開催させていただきます。

今展は、田辺小竹先生の竹と、若宮隆志先生の漆という 2 つの伝統工芸分野のコラボレーションから、新しい伝統文化を生み出すことをコンセプトに開催、第二回目を迎えます。

今回は開創 1200 年を迎える高野山をテーマに作品を発表いたします。弘法大師は都の喧噪を遠く離れ、紀伊山地の雄大な自然に抱かれた高野山を密教の道場の地として選びました。国、社会の安泰を永遠に祈り、多くの人々の幸福のために活躍しうる人材を育成したいという思いが弘法大師を突き動かしました。1200 年という大きな節目を迎え、次の百年、千年への新たな時代への扉が開かれます。その弘法大師の清新な魂をこめた二人の先生の作品を、一堂に展覧いたします。

二人の作家の個性が存分に発揮される今展を、ぜひご高覧賜りますようご案内申し上げます。

平成 27 年 高島屋美術部





空
海
と



高
野
山



竹と漆で若冲をやってみたい

江戸時代を代表する画家、伊藤若冲（1716～1800）の絵画を題材にした作品展「竹×漆プライスコレクションの若冲」から二年が経った。田辺小竹と若宮隆志による史上初の竹と漆（高蒔絵）のコラボレーション。世界的な日本美術コレクターとして知られるジョー・プライス夫妻から、工芸に新たな息吹を吹き込む活動と、コレクションの画像利用について全面的な支援を約束された。会は予想以上の成功をおさめ、以来、異分野の工芸作家による合作は流行の兆しを見せている。

竹×漆プロジェクトをはじめた時、二人は「同じことはくり返さない」と決めた。人気がでたからと同じものを造り続けるのではなく、限られた時間を新しい作品の創作に費やすことにした。そうして、二人が第二章のテーマに決めたのは、開創千二百年を迎えた「高野山」である。若冲絵画のようにモデルになる作品があるわけではない。弘法大師空海や真言密教という「かたちなきもの」を題材とする試みだ。

出合いは倫敦

2009年11月、ロンドンの高級ショッピングストリートとして知られるボンドストリート近くのギャラリー。田辺と若宮は同じ会場で展覧会をして知り合った。そこにもう一人、主催者に呼ばれて日本の若手工芸作家に会いに来た大学院生。それが私である。

チャイナタウンで夕食を食べた後、有名オークションハウスの内覧会に二人を案内した。江戸時代の作品を中心に数百点の日本美術が並んでいる。そこで田辺の目に留まったのが一本の煙管筒^{きせるづつ}だった。籐で編まれた江戸時代後期のそれは、長いあいだ人の手に触れて艶のある鉛色になっている。そして、漆の高蒔絵で立体的に表現された草花が全面を覆っている。やおらそれを指さし、「若宮さん。僕、前からこういうのをやってみたかったんですよ」と田辺。にっこりと笑った若宮の口から出た返事は、「あー、こういうのはできないんですよ」だった。

竹や籐で編まれたものは、凹凸がある上にしなる。柔軟で油分の多い竹や籐の特性は、硬く柔軟性のない漆とは相性が悪く、簡単に割れたりはずれたりする。明治時代までは存

在した技法だったが、手間がかかったのだろう、いつしか失われてしまった技術なのだという。

このとき、一旦は引き下がった田辺だったが、諦めきれずに若宮に技術開発を依頼していただきたい。それから二年後の2011年10月、私は二人から、技術の再現に成功したことを告げられた。竹×漆プロジェクト誕生の瞬間である。

美術の階層を越えて

美術とは人間社会をうつす鏡とも言える。浮世絵のように一般大衆のために大量に刷られたものよりも、支配者が大金をかけて有名芸術家に描かせたものの方が良い。花籃や漆碗のような用途があるものよりも、絵画のように鑑賞を基本とするものの方が良い。一般社会と同じように上下や優劣といった意識をとまなう階層がある。

人々がこのような意識を持つようになった背景には、西洋美術史をお手本にして日本美術史が作り上げられたという過去がある。1858年、日本は開国し欧米の政治・社会・文化の仕組みを学んだ。当時の欧米における純粹美術の中心は彫刻や絵画、中でもギリシア神話や聖書を題材にしたものが最高峰とされていた。江戸から明治にかわったばかりの日本で、それにあてはまるものとして選ばれたのが仏像や仏画だった。こうして仏教関連の諸文物は、我々の文化を代表する「美術品」となったのである。

日本美術史という新しく壮大なストーリーが生みだされていく中、仏教美術とは反対に「美術品」になりきれなかったものもあった。その代表格とされるのが、西洋に対応するものがなかった「書」。次が、いわゆる工芸である。欧米で応用美術とされた工芸は純粹美術よりも劣るものであった。こうして、仏教美術と工芸とは、同じ美術の分野でも階層に大きな隔たりのある、遠い存在となってしまった。

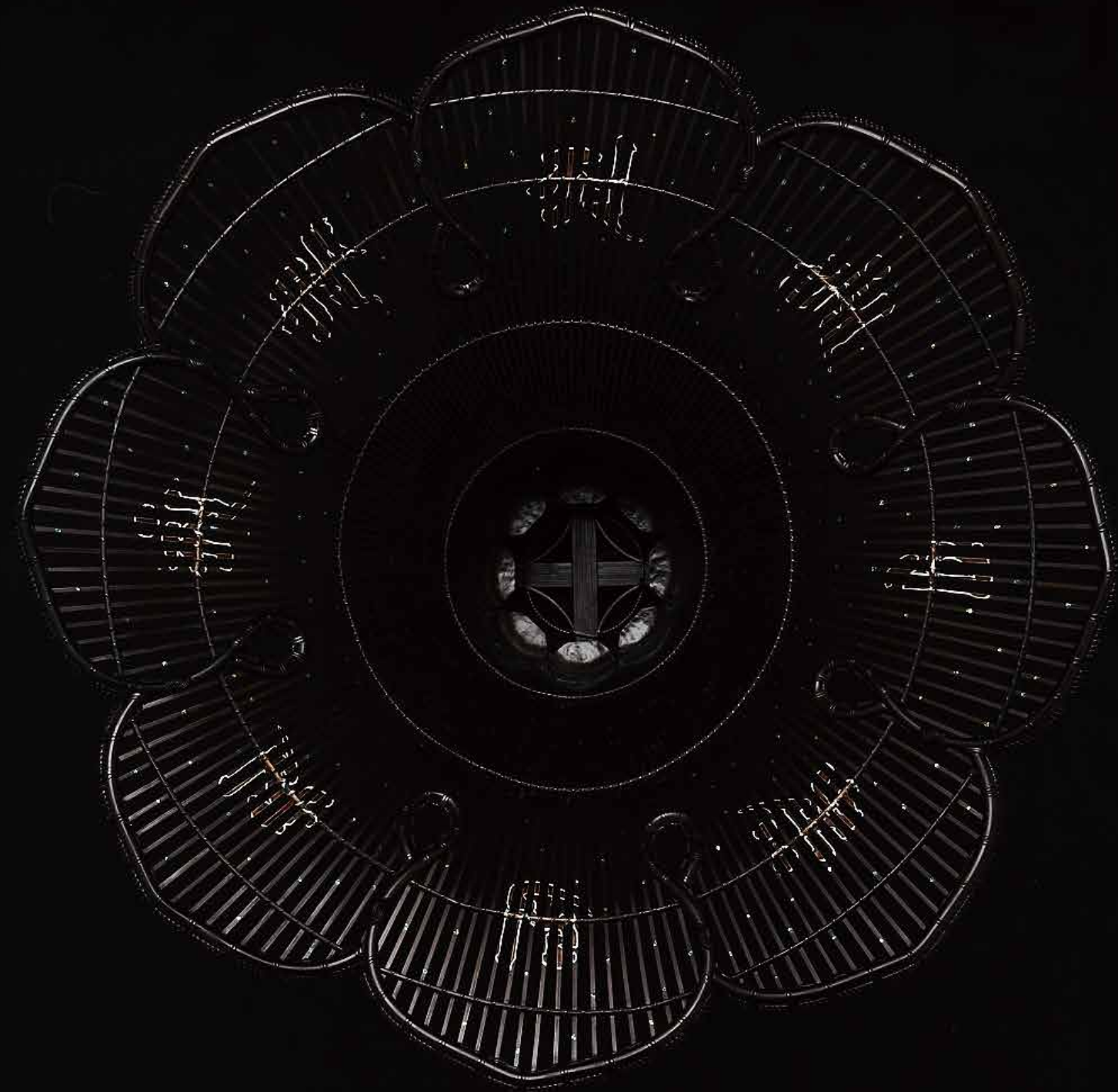
そう考えると、二人がここで踏み出そうとしているのは小さくないステップだ。仏教を題材に工芸を制作する。百年以上も積み重ねられてきた日本美術史の確固たる構造を突き抜け、跳び越えて、竹と漆で「高野山」を題材とする美を表現する。そう、この階層を超越し、これまでには存在しなかった美を生み出すこと。それこそが、プロジェクト第二章が目指すゴールなのである。

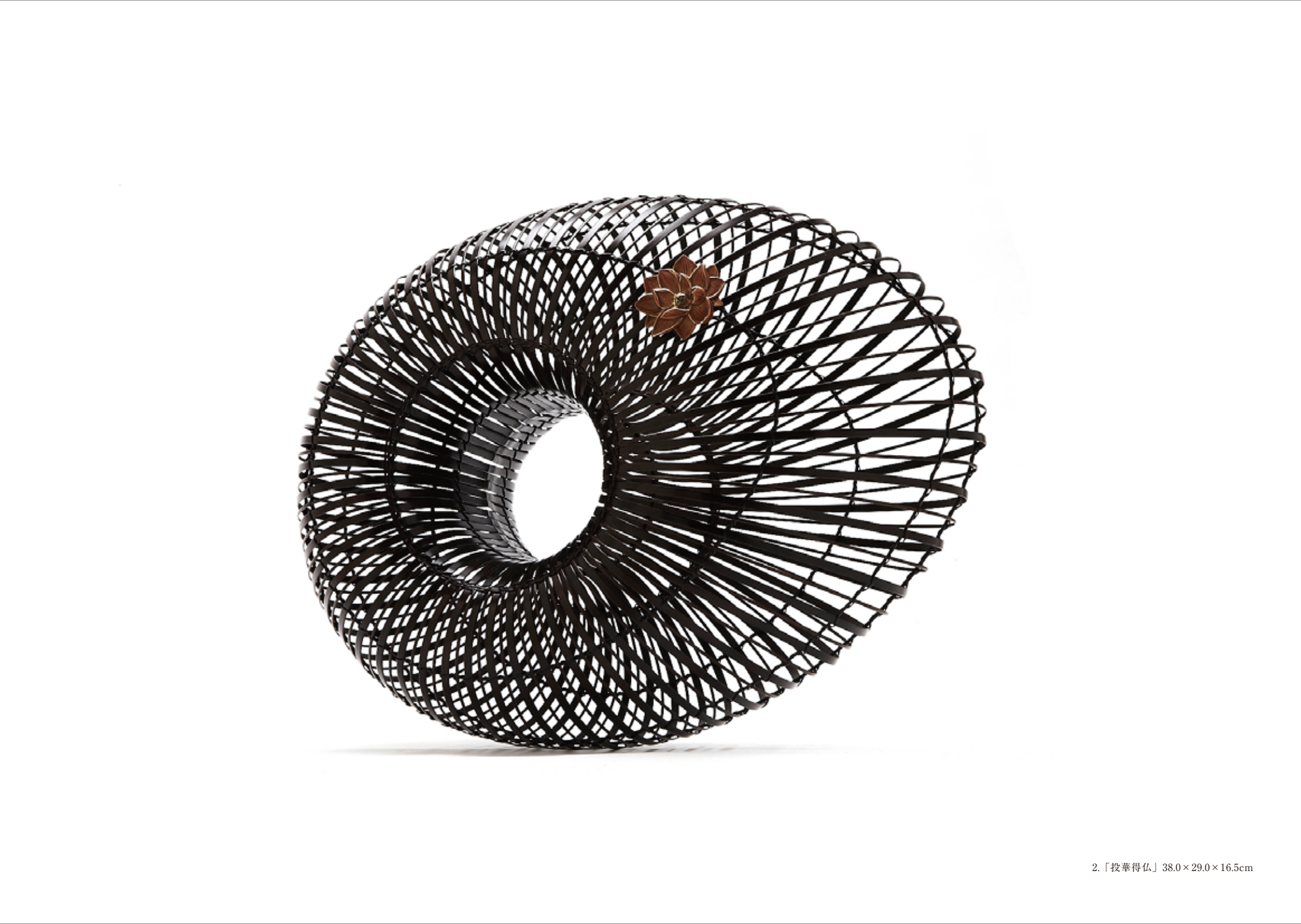
前崎信也

京都女子大学 准教授



1. 「八葉蓮華」 42.0×42.0×29.5 cm





2. 「投華得仏」 38.0×29.0×16.5cm



3. 「笛を忌む」 42.0×42.0×29.5 cm



4. 茶箱「町石道」 19.5×19.5×18.0cm



5. 茶杓「飛天」／6. 茶杓「明星」／7. 茶杓「遣唐使」／8. 茶杓「狩場明神」／9. 茶杓「三鈴杵」／10. 茶杓「御廟橋」すべて 1.1×18.8×1.8cm





12. 提物「玉川の魚」13.5×5.0×9.0cm
13. 根付け「ハヤ」4.3×2.8×3.5cm



14. 提物「飛行三鈴」10.0×4.6×9.4cm
15. 根付け「三鈴杵」4.7×2.3×2.0cm



16. 硯箱「蓮池」27.0×15.5×9.0cm



17. 飾り箱「聲響指帰」37.5×10.5×9.5cm



18. 「善女龍王」 29.5×22.0×44.5cm







19. 筆「須」 34.5×2.0×2.0cm



20. 筆「須」 30.0×1.8×1.8cm



21. 「遣唐使」 59.0×34.0×23.0cm

1.「八葉蓮華」 （はちようれんげ）

両部曼荼羅の一つである胎藏曼荼羅の中心に中台八葉院があります。宇宙の真理をあらわす大日如来を中央に、四如来・四菩薩が八蓮弁に座す胎藏曼荼羅の中心となる院です。そこには大悲大定の威光に満ちた大日如来と、人々の仏性を育む諸如来、それを支援する諸菩薩の功德が示されています。

2.「投華得仏」 （とうけとくぶつ）

弘法大師の法号は「南無大師遍照金剛」です。この法号となった理由は、投華得仏という儀式に由来しています。真言密教において投華得仏とは、信者になるにあたり自らの守り本尊となる仏を決める儀式です。目隠しをして曼荼羅の上に華を投げ、その華が落ちたところに縁のある仏様がおられるとされます。目隠しをした弘法大師が金剛界・胎藏界の數曼荼羅に導かれ、投華得仏に臨まれました。すると、何度行っても大日如来に落下するという縁があったところから、「南無大師遍照金剛」の号を授けられたのです。

3.「笛を忌む」 （ふえをいむ）

天保10年(1839年)に完成した『紀伊統風土記』には、このように記されています。豊臣秀吉が高野山へ参詣に来られた時の事です。秀吉は親世太夫を同行していたため「能を見よう」ということになりました。ところが僧達は「お慰みに能をご覧になるのは結構なことですが、当山では弘法大師のお定めの法により、笛を吹くことを戒めております。」といいます。秀吉はこれ聞いて不思議に思い「これは異な事を聞く。色々な楽器があるというのに、笛だけがいかなんというのはどういう事か」と尋ねました。僧はそこで弘法大師にまつわる話をはじめました。太閤様が昨日ご覧になった柳の木(蛇柳)の少し向こうに、遙か昔から一匹の龍が棲んでおりました。それを見て弘法大師は「あの龍をこのままにしておけば、誰も近づくこともできまい」とお思いになり、そこへ赴いて、龍に向かってこう言われました。「私は、この山をまさに仏法の靈地にしようと思っている。しかし、おまえがここには皆が恐れて近づくこともできない。すまないが、どこか別の場所へ移り住んではくれないか」と。それでも一向に動こうとしない龍の説得を幾度か試みましたが、埒がききません。それならばと、弘法大師は秘密の真言で龍のうろこへ毒虫をまき散らしました。龍は五体を投げ出し、かゆみにのたうち回り、ついにそのかゆみに耐えきれずに降参して言いました。「この虫をぜひ消してくれ、言うとおりにこへでも行くから」と。そして、龍はそこから20町(約2.1km)向こうの山ふもとへ立ち退いたのです。しかしながら笛は龍の声を表す楽器。この音を聞いて、自分の友が来たかと思った龍が動き出すのを押さえるために笛を戒めているのです。この話を聞いた秀吉は「なるほど。よしよし。笛無くとも苦しゅうないぞ」と、笛なしで能を楽しんだといわれています。

4. 茶箱「町石道」（ちょういしみち）

高野山町石道(こうやさんちょういしみち)は九度山の慈尊院から高野山奥の院の御廟まで、全長約24kmの参道です。1町おきに置かれた町石は、慈尊院から伽藍まで180基、伽藍から御廟まで36基あります。そして、36町ごとには1里を表す里石(りせき)が置かれ計4基あります。高野山参拝ルートは丹生都比売神社から慈尊院、そして、この町石道を登って大門をぐぐり、壇上伽藍・根本大塔から奥の院御廟までの道のりです。

5. 茶杓「飛天」（ひてん）

弘法大師(幼名真魚)は7歳の時、世を救うという大きな請願をなてました。讃岐国多度郡(現在の善通寺市)にある我拝師山に登り、三世(前世・現世・来世)の諸仏・十方の菩薩様に念じます。「私は仏法に入り全ての人々を救いたいのです。私の願いが成就するものならば、お釈迦様、とうぞ姿を現してその証を与えて下さい。それができないのであれば、一命を捨て、この身を諸仏に奉げます」と、断崖絶壁の山の頂から谷底に飛び降りました。すると、突如として紫色の雲が湧き起こり、その中大光明を放って百宝の蓮華に座したお釈迦様が現れました。羽衣を身に纏った天女に抱きとめられた弘法大師に「一生成仏」とおっしゃったのでした。大師はこの靈験から仏縁を世の人々に届けようと捨身ヶ岳に寺を建立し、お釈迦様を安置して本尊としたといわれています。

6. 茶杓「明星」（みょうじょう）

弘法大師は、室戸崎(現在の室戸岬)にある海食洞窟の行場で虚空蔵求聞持法の修法を行い、虚空蔵菩薩の真言を唱えつづけていました。ある朝のこと、虚空蔵菩薩の象徴である明けの明星が飛来し、真言を唱える大師の口に入りました。これが弘法大師という小宇宙(人間)が、虚空蔵菩薩という大宇宙と無二一体となった瞬間なのです。

10. 茶杓「御廟橋」（ごびょうばし）

奥の院・高野山の表参道入り口、一の橋から弘法大師御廟まで通じる約2kmの参道の最後の橋が御廟橋です。この橋を渡ると大師御廟のある靈域。橋を渡る人は、橋の前で服装を正し、礼拝し、清らかな気持ちで靈域に足をふみ入れます。

11.「大門」（だいもん）

大門は高野山の玄関口にある総門です。高さが約26mあり、両側に高さ約5mの「阿」・「吽」の金剛力士像が配置されています。正面に掲げられているのは「日々の影向(ようごう)を闔(かか)さずして、処々の遺跡を檢知す」という言葉。これは同行二人信仰、つまり「お大師さまは毎日御廟から姿を現され、所々を巡ってはわたしたちをお救いくださっている」ということを表しています。

12. 提物「玉川の魚」（たまがわのさかな）

13. 根付け「ハヤ」

高野山奥の院の御廟橋の下に流れる玉川にはハヤという魚がたくさん泳いでいます。弘法大師が奥の院に流れるこの玉川のほとりを通りかかったとき、ある老人がハヤを串にさして焼いていました。串に刺されたその魚を老人から買った弘法大師は、串を抜いて魚を玉川に流しました。すると半焼けの魚がたちまち甦り水の中を泳ぎはじめたのです。魚は弘法大師からの恩を忘れず、背中に焼けた串跡を残していたといいます。以来、その老人は殺生の罪を悔い、魚を捕るのをやめました。こうして、今でも高野山では玉川のハヤを食べないのです。

14. 提籃「飛行三鈷」（ひきょうさんこ）

15. 根付け「三鈷杵」（さんこし）

8. 茶杓「狩場明神」（かりばみょうじん）

9. 茶杓「三鈷杵」

弘法大師ゆかりの宝物として、御影堂内々陣に封印されているものに「飛行三鈷」と呼ばれる密教法具の三鈷杵があります。延暦23(804)年5月、弘法大師は遣唐使の一員として中国の唐王朝に渡りました。2年間の滞在の後、帰国する際に「私の学んだ密教を教え広める根本道場として伽藍を建立しようと思う。願わくば伽藍建立に適した地を示したまえ」と、明州の浜で誓願をなてます。空に向けて大師が三鈷杵を投げると、それは紫色の雲に包まれて、遙か東の空へ飛び去ったのでした。日本に帰国し、伽藍建立の地を探して旅をする大師は、紀伊の国、紀の川のほとりまで来ます。すると、そこで身の丈八尺はあるかという、白黒二匹の犬を連れた狩人(狩場明神)に出会います。この地へ来た理由を大師が説明すると、狩人はこう言います。「そういえば、この近くの山に、昼には瑞雲たなびき、夜には瑞光を放つところがございます。もしかしたら、お探しの三鈷杵はそこかもしれません。そこまでこの二匹の犬に案内させますので、後についてお行き下さい。」と。犬に連れられてその場所に行くと、松の枝に、明州の浜で投げた三鈷杵が、光を放ちながら掛かっていたのです。弘法大師はこうして、高野山に伽藍を建立する事となったのです。

15. 硯箱「蓮池」（はすいけ）

高野山は周囲を内八葉外八葉の峰々に囲まれ、蓮華のような地形をしています。蓮は仏教にとって特別な意味を持つ花のひとつです。蓮は泥水の中から生じて、清浄な美しい花を咲かせます。このことから仏教における蓮の花は仏の智慧や慈悲の象徴とされています。そして、蓮の蕾の中には花が散る前から実が結実しています。全ての人々が生まれ付き仏性(実)をそなえていることに喻えられて、大切にされるのです。

16.「聲磬指帰」（ろうこしいき）

「聲磬指帰(ろうこしいき)」は延暦16(797)年、弘法大師が24歳のときに書いた著作です。入唐前、青年時代の弘法大師の文才が遺憾なく発揮された自筆の書物であるとされています。この題には「仏の教えに暗く、聞く耳を持たない者に教えを示す」という意味が込められており、儒教、道教、仏教の3つの教えを3人の架空の人物に託すお話が戯曲風に語られます。

19.「善女龍王」 （ぜんによりゅうおう）

高野山の伽藍にある蓮池の中央の小島には善女龍王という雨の神を祀る社があります。天長元年(824)、干ばつが続いたことから時の朝廷は雨乞いの修法をおこなうことにしました。弘法大師が京に召され、宮中の神泉苑にて「請雨経法(しょうきゅうほう)」を行います。しかし、一週間経っても雨は一滴も降りません。不思議に思い調べたところ、前々から大師の名声をねたんでいた僧の守敏が呪力を使い、雨を司るあまたの龍神を水瓶に閉じこめていたのです。唯一、善女龍王だけが守敏の手から逃れていることに気付いた大師は、善女龍王を北インドの無熱池(むねっち)という池から呼び寄せ、3日間にわたり国中に大雨を降らせる事に成功したのでした。「高野大師行状図画」には、善女龍王の姿が大蛇の頭の上に乗る小さな金色の蛇として描かれています。それ以来、高野山で雨乞いの法を行う時には金堂に善女龍王が描かれた掛け軸を掛けて祈願されてきたといいます。

17. 筆「𪛗」（あ）

18. 筆「𪛗」

梵字(サンスクリットを表す文字)の「あ」という文字は真言仏教の教主である大日如来を表す字です。また、「あ」は様々な言葉の中で最初にくる文字で、万物の根源を表します。弘法大師が残した言葉に「阿字の子が、阿字のふるさと立ち出でて、また立ちかえる阿字のふるさと」があります。私達は大日如来の子として生を受け、その役目が終わると親である大日如来のところへかえってゆくという意味です。

20.「遣唐使」（けんとうし）

7. 茶杓「遣唐使」

弘法大師は、延暦23(804)年7月6日に、第18次遣唐使の一員として唐に向けて出発します。遣唐使は「よつのふね」とも呼ばれたように、4艘の船で渡っていたとされています。第18次遣唐使一行には、最澄や橘逸勢、後に中国で三蔵法師の称号を贈られる靈仙がいました。中でも最澄は唐に渡る以前から天皇の護持僧である内供奉十禅師の一人に任命されており、既に仏教界に確固たる地位を築いていました。最澄に比べれば、弘法大師はまったく無名の一沙門。名も無き一介の僧が命を懸けて海を渡り、経典や法具とともに密教を日本に持ち帰り、高野山を開いたのです。

高野竹・高野真竹の使用



本展覧会で使用した竹は、特別な許可を得て、高野山に自生している竹を使用しております。

高野竹（こうやちく）

高野竹(スズ竹)は節が低く、硬く、肉厚で丈夫。和竿ではへら竿に使われます。高野山周辺で多く取れたことからこの名が付きました。高野山の玄関口である大門のすぐ隣にも高野竹を見ることができます。堤物や茶箱・硯箱・筆などを中心に高野竹を使用しています。

高野山真竹（こうやまだけ）

高野山の参道の1つ、町石道の始点である丹生都比売神社のすぐ近くに真竹の竹林があります。高野町石道は『紀伊山地の靈場と参詣道』で世界遺産登録されており、弘法大師もこの町石道を通り、丹生都比売神社に参拝しました。

彦十 蒔絵 若宮隆志 (ひこじゅうまさえ・わかみやたかし)

- 1964 輪島市に生まれる
- 1984 塗師屋に就職、輪島塗の製造販売の基礎を学ぶ
- 1988 喜三誠山師より蒔絵技法を教わる
- 1998 平澤道和師より乾漆技法や漆の天日黒目など漆芸の基礎を教わる
漆掻きと漆木の植樹を始める
- 2002 輪島漆器青年会 第三十代会長を務める
- 2005 ポーラ ミュージアム アネックス(銀座)にてグループ展を企画、開催
Museum für Lackkunst(ミュンスター／ドイツ)にて
「青銅塗 梵鐘型 重香合」収蔵
- 2006 Museum für Lackkunstにて「白貫入塗 抹茶椀 不二」収蔵
- 2007 Victoria and Albert Museum(ロンドン／イギリス)にて
「漆芸額 変わり塗 源氏物語」収蔵
- 2008 燕子花にて「泉鏡花」の文学世界と「小村雪岱」のデザインを
テーマに個展を開催
- 2010 タイ(チェンライ)にて仏塔の制作に携わる
在英国日本大使館にてCOLLACQUERATION展を企画、展示
- 2013 Asian Art in Londonに出品(2008より連続参加)
田辺小竹×彦十蒔絵「ブライスコレクションの若冲」展
台南市文化祭に出品、ワークショップを開催
- 2014 Bahrain National Museum 「Makie」展
「融合する工芸」―出合いがみちびく工芸のミライー展開催
「犀の賽銭箱」が国際漆展にて大賞受賞
平成26年度文化庁文化交流使に指名され
イギリス・フランス・中国で作品展示と講演を行う。

漆器は何千年ものあいだ日本人の生活と結びつき、民俗的な道具として使用され
生き続けてきました、そこに先祖の想いや生きる知恵が込められていると考えていま
す。それらを学び作品に取り入れ現代の生活に蘇らせる事は、先祖の想いまでも
後世に伝える事が出来ると考えおります。 古典の技法と意匠の研究開発により、現
代生活の中に本物の漆芸を蘇らせる事を目的に取り組んでおります。

田辺小竹 (たなべしょうちく)

- 1973 大阪府堺市に三代田辺竹雲斎の次男として生まれる
- 1999 東京藝術大学 美術学部彫刻科卒業
- 2007 「Beyond Basketry」招待出品・講演／ボストン美術館 (USA)
「COTSEN bamboo prize」受賞／サンフランシスコアジア美術館 (USA)
- 2008 「New Bamboo」／ニューヨークジャパソサエティ (USA)
「国際交流基金日本文化紹介派遣事業」
南米三カ国にて竹工芸の講演・ワークショップを開催／
(ペルー・ボリビア・エクアドル)
個展「田辺小竹襲名展」／大阪高島屋(大阪)
- 2010 「Modern Master」／ミュンヘン(ドイツ) バイエルン賞 受賞
個展「Connection-∞-」／東京高島屋ギャラリーx(東京)
- 2011 個展 田辺小竹展 ジェイアール名古屋タカシマヤ/大阪高島屋
- 2012 「JAPAN NEXT EXHIBITION」 内閣府派遣 フランス・パリ装飾美術館
アメリカ・NY MAD美術館
「Design Basel 43」 Pierre Marie Giraud galleryパーゼル(スイス)
内閣官房 国家戦略室より「世界で活躍し『日本』を発信する日本人プロジェクト」
にて選出/表彰
第59回日本伝統工芸展 宮内庁買い上げ
- 2013 田辺小竹・彦十蒔絵展 竹×漆 「ブライスコレクションの若冲」
高島屋大阪店・日本橋高島屋
- 2014 円空大賞展 岐阜県美術館 円空賞受賞
第62回伊勢神宮式年遷宮 葛編み籃 献上
個展「ZEN」Pierre Marie Giraud gallery,(ペルギー)／
ビクトリア&アルバート美術館作品買い上げ
田辺小竹・若宮隆志展 竹×漆 「ZEN」TAI Modern gallery サンタフェ(USA)
- 2015 第44回日本伝統工芸近畿展 日本伝統工芸近畿賞

[Museum collection]
フィラデルフィア美術館(USA)、シアトルアジア美術館(USA)、ボストン美術館(USA)、
ロングビーチアート美術館(USA)、サンフランシスコアジア美術館(USA)、日秘文化会館(ペルー)、
ボリビア国立博物館(ボリビア)、大英博物館(UK)、クラーク日本藝術研究所(USA)、宮内庁、
ミネアポリス美術館(USA)、ビクトリア&アルバート美術館(UK)、森上美術館(USA)

編集・監修／前崎信也

写真／沼忠之

デザイン／北田進吾

発行／高島屋美術部
© 2015

田辺小竹・若宮隆志展 竹×漆 「空海と高野山 1200 年」

〔大阪展〕 4月29日(水)→5月5日(火)高島屋大阪店6階美術画廊
〔東京展〕 6月24日(水)→30日(火)高島屋日本橋店6階美術画廊

東京展、大阪展いずれも開催時間/午前10時～午後8時(最終日は午後4時閉場)

